

はじめに

新たな時代への対応

沖縄県は沖縄県学力向上推進5か年プラン・プロジェクトⅡのなかで、「他者と関わりながら課題解決に向かい『問い』が生まれる授業」をめざす授業像として示しています。新たな時代へ対応する視点をもった授業改善を推進していく必要があると考えたからです。

なぜ「問い」なのか

なぜ「『問い』が生まれる授業」としたのでしょうか。子供たちが主体性を発揮している授業では共通して、子供たちが追求したいと思う「問い」が生まれています。「問い」をもつということは、授業で学ぶ内容について、子供たちが与えられた情報を単に受け入れるだけでなく、それをもとに、論理的、客観的で合理的な思考を展開させるということだと捉えており、価値観が多様化し、正解や不正解が明快に導き出せない社会では、必要な力であると考えています。

「問い」が生まれる場面

では、どんな場面で「問い」は生まれるのでしょうか。悩んでいる教員も少なくないようですが、難しく考える必要はないと考えています。授業のさまざまな場面で「問い」は生まれます。特に授業終末の「振り返り」は、「問い」を引き出すのに有効な場面だと考えます。授業で学習したことを振り返り、次の学習について見通しを持つことで、新たな「問い」が生まれやすくなります。

子供たちが相互評価をする場面でも「問い」は生まれます。友達の考えや作者の主張に対して、あるいは仲間が作成した作品などに対して、「私ならこうする」「なぜこうしなかったのだろう」「なぜそうしたのだろう」といった意見や疑問は「問い」そのものでしょう。

根拠を考えることや比較することも「問い」につながります。根拠を考えることは、「どうして～といえるのか？」と「問い」を発することになります。また、比較の視点を持つことで、「○○は△△なのに、□□はどうして☆☆になるの？」という「問い」が生まれやすくなります。

見方・考え方と「問い」

学習指導要領では、「教科等による見方・考え方を働かせる」という考えが示されています。国語では「言葉による見方・考え方」、社会では「地理的・歴史的な見方・考え方」などです。それは、考えるためのツールになりますし、先に挙げた根拠や比較の例と同様、「問い」を引き出すためのツールにもなります。

「問い」を発する力

県内の小中学校においても、対話的な活動が意識されたことで、以前にも増して子供たちが生き生きと発表している場面が多くなっています。しかし、聞き手である子供たちから、「どうして……?」、「もし……でもそうなるのかな?」、「……について、やってみたい」など、発表内容について「問い」を発している姿を見ることは少ないように思います。「問い」を発するためには、自分が感じた違和感やわからなさを言葉にできる力、つまり問い返したり、質問したりすることのできる力を育成する必要があります。

問い返したり、質問したりすることで、自分の理解や解釈が確認できます。自分の発表などに対して良い質問をされることにより理解が深まったり、新たな「問い」が生まれたりします。対話を充実させ、深い学びにつなげるためにも、「問い」を発する力の育成が求められます。

教師の創意工夫に期待

授業において児童生徒の資質・能力の育成に向け、言語活動を充実させるために、授業づくりにおける教師の創意工夫も大いに期待されることです。

本時のねらいを達成するためにどんな教材を活用するか、どんな学習形態が有効か、柱となる発問をどうするかなど、授業づくりについて、多くの教師がより良い授業をめざし、様々な創意工夫をしています。しかし、教師が一方的に説明し続けたり、市販のノートをなぞるだけの授業展開のまま進めていたりといった授業も見受けられます。

授業を振り返ることで課題が見えてきます。簡単に解決できる課題もあれば、なかなか解決に至らない課題もあります。しかし、それが教師にとっての「問い」であり、その解決に向けて試行錯誤することが教師にとっての「深い学び」になります。児童生徒に学ぶことの大切さや楽しさを伝えることのできる「学び続ける教師」であってほしいと考えています。

子供たちの未来を左右する「主体性」

これからの社会は、グローバル化やITの進化等により、価値観は多様化し、何が正解か不正解かが容易に見いだせない社会になっていくといわれています。多様な価値や考え方を交差させながら、より良い考えや最適解にたどり着くための「問い」をもち、解決の過程を楽しむことが、自分自身の良さを発揮することにつながるのではないのでしょうか。その意味でも、子供たち自身が「問い」を持ち、主体的に学習に取り組めるかどうか、子供たちの未来を左右するものと考えます。

積極的に活用

本ガイドは、「問い」が生まれる授業に向けて、その基盤となる「授業における基本事項」や「問い」が生まれる授業のあり方について解説しています。積極的に活用していただき、現場で切磋琢磨する先生方の支援になればと考えています。